第1課　十字架を誇る

【暗唱聖句】

「まず初めに、イエス・キリストを通して、あなたがた一同についてわたしの神に感謝します。あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです」ローマ1:8

【今週のテーマ】

【日曜日・使徒パウロの手紙】

ローマの信徒への手紙がいつ頃執筆されたのかを知る手掛かりとして、最後の挨拶のところで「ケンクレアイの教会の奉仕者でもある、わたしたちの姉妹フェベを紹介します」（ローマ16:1）と書かれてあることから、ここでこの手紙を書いたのではないかと推測されます。ケンクレアイはコリントに近く、パウロがコリントに教会を設立したのは紀元49年から52年にかけての第二次伝道旅行のときでした。そして紀元53年から58年にかけて再びここを訪れています。このときケンクレアイの教会も設立されたであろうことを考えると、ローマの信徒への手紙が執筆されたのはこのころということになります。58年初頭にローマを訪問しますが、その直前に、この手紙が書かれたのであろうと一般に考えられています。

ちなみに、ローマのキリスト者共同体は聖霊降臨に居合わせた人々のいずれかによって設立されたと考えられます。当時、ローマには多数のユダヤ人が在住しており、シナゴーグにはローマ市民も出入りしていたようで、このような中でイエス・キリストが伝えられていったものと考えられています。そこで、パウロがローマの教会を訪問したいと考えていました。また、ローマの教会の信徒もパウロを心待ちにしていたようです。

また、パウロがこのローマ人への手紙を書いた背景には、ガラテヤ教会の混乱がありました。ガラテヤと同様に、偽教師たちが間違った教えをローマの教会で言い広められる前に、正しい福音について手紙を書かなければならないと考えたようです。その中でも特に強調したのは、かつてユダヤ人にだけ与えられていた希望と約束が、今や異邦人にも与えられているということでした。

【月曜日・ローマ訪問―パウロの強い願い】

このようにキリストの名がまだ知られていない所で福音を告げ知らせようと、わたしは熱心に努めてきました… こういうわけで、あなたがたのところに何度も行こうと思いながら、妨げられてきました。しかし今は、もうこの地方に働く場所がなく、その上、何年も前からあなたがたのところに行きたいと切望していたので、イスパニアに行くとき、訪ねたいと思います」ローマ15:20～24

パウロはローマに早く行きたいと熱望していましたが、キリストの福音がまだのべ伝えられていないところで、福音を告げ知らせる使命がありました。そのために、ローマになかなか行くことができない状況にあったことを述べています。パウロは第一優先するのは、常に福音を聞いたことがない人々に、のべ伝えることでした。

「…異邦人はその人たちの霊的なものにあずかったのですから、肉のもので彼らを助ける義務があります」ローマ15:27

また、パウロは異邦人クリスチャンたちにエルサレムの聖なる者たちの中の貧しい人々を助ける義務があると言っています。その理由は、霊的な恵みに預かったのだからというものでした。このパウロの言葉から、貧しい人々に対するパウロの思いや、そのような人々に互いに助け合うのがクリスチャンの務めであるという教えと共に、肉において助けるのが義務だとはばかることなく言えるほど、霊的恵み預かることの素晴しさに確信を持っていたことがわかります。わたしたちが世に伝えている福音メッセージも同様に、それがどれほど大きな価値があるものなのかということを、過小評価することなく、どうどうと語っていきたいものです。

【火曜日・ローマにおけるパウロ】

「わたしたちがローマに入ったとき、パウロは番兵を一人つけられたが、自分だけで住むことを許された」使徒28:16

パウロはすぐにでもローマへ行きたいと考えていましたが、第三次伝道旅行の最後にエルサレムに到着したあと、

迫害者たちに捕らえられてしまいます。

 「七日の期間が終わろうとしていたとき、アジア州から来たユダヤ人たちが神殿の境内でパウロを見つけ、全群衆を扇動して彼を捕らえ、こう叫んだ。「イスラエルの人たち、手伝ってくれ。この男は、民と律法とこの場所を無視することを、至るところでだれにでも教えている。その上、ギリシア人を境内に連れ込んで、この聖なる場所を汚してしまった。」使徒21，27，28

かつてパウロ自身が行っていたユダヤ人クリスチャンへの迫害を、パウロ自身が受けることになります。そして、騒ぎを聞きつけたローマの千人隊長がその場をおさめるのですが、半狂乱になって騒ぎ立てるユダヤ人たちから訴えられたパウロは、やがてローマの市民権を持っていることがわかり、鞭で打たれるようなことはありませんでしたが、祭司長たちと最高法院など、多くの人たちの前で弁明することになります。またカイサリアでは、総督のフェリクスのもとで2年の歳月を過ごすことになりますが、これはユダヤ人に気に入られようとして、フェリックスがパウロを監禁したままにしておいたからでした。パウロは最終的に上告することで、皇帝カエサルの判断を仰ぐことになります。そして、カイサリアからローマに移されることになります。ユダヤのアグリッパ王は、「あの男は皇帝に上訴さえしていなければ、釈放してもらえただろうに」（使徒26:32）と言いましたが、パウロはこうして思わぬ形でローマに行くことになります。これはパウロが捉えられてから3年の月日が経過していました。

パウロが囚人という身分でローマにいくことになるとはいったい誰が予想できたでしょうか。この出来事は、どれほど良い目的のためであったとしても、わたしたちの願った通りに物事が進まないことがあるということを教えています。しかし、そこには神様の何か特別なご計画があります。それを信じることが大切です。

　実際、パウロは多くの場所でキリストを語る機会が与えられました。そして最後はなんとローマの宮廷でキリストを証する機会が与えられていくのです。当時の皇帝は悪名高きネロでしたが、この頃はまだキリスト教徒に対して弾圧をするようなことはありませんでした。セネカという有名なローマの哲学者がネロの補佐官であったのですが、パウロとセネカの間に何通も手紙のやり取りがあり、後にセネカがパウロを高く評価したと言われています。

またエレン・G・ホワイトは「宮廷はパウロの説教によってではなく、彼の受けた束縛によって、キリスト教へと注目するようになった」（艱難から栄光へ下P156）とも述べています。

【水曜日・ローマの「聖なる者」】

「神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように」ローマ1:7

パウロは異邦人クリスチャンであるローマのクリスチャンに対して、神に愛されている者、神から召されている者、そして聖なる者と三つのことを冒頭の挨拶で述べています。クリスチャンとは、神から愛され、召され、聖とされた者であることをしっかり受け止めることは大切なことです。

　しかも、驚くべきことに私たちが愛され、聖なる者として召されたのは天地創造の前だと聖書は語ります。

「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました」エペソ1:4

本来、キリストの十字架の贖いは、すべての人のためでした。悪魔、悪霊だけが地獄に落とされればよかったのです。

「ただ、「天使たちよりも、わずかの間、低い者とされた」イエスが、死の苦しみのゆえに、「栄光と栄誉の冠を授けられた」のを見ています。神の恵みによって、すべての人のために死んでくださったのです」へブル2:9

しかし、多くの人が神様からの救いの招きを自ら拒んだのです。その結果、神を信じるものは聖なる者として、他の人たちと分けられたのです。

【木曜日・ローマの信徒たち】

「まず初めに、イエス・キリストを通して、あなたがた一同についてわたしの神に感謝します。あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです」ローマ1:8

ローマの教会の成り立ちについてはよくわかっていません。使徒の訪問を一度も受けていないにも関わらず、数十年で広く全世界に知れ渡るようになっていたというのは驚くべきことです。聖霊に動かされた人々が、ローマにおいて福音を述べつたえたのでしょう。使徒だけが特別に伝道していたわけではないということです。その中には、ペンテコステの日に聖霊降下を受けて劇的に変えられた人たちがいたのだろうともいわれています。

ローマの教会の人たちの信仰が全世界に言い伝えられるほどだったパウロは述べているわけですが、具体的には、

「あなたがた自身は善意に満ち、あらゆる知識で満たされ、互いに戒め合うことができると…」（ローマ15:14）と語っています。

彼らの行動は常に善意に満ちていました。わたしたちの行動の動機も、善意に満ちたものでありたいと願います。また、あらゆる知識に満たされていました。聖霊に導かれたみ言葉を学びを通して、わたしたちはあらゆる知識に満たされるようになります。そして、お互いに愛があったからこそ、互いに戒め合うことができたのでした。